鈴木商店と再生ゴム

足立宇三郎

鈴木商店にて着手した事業が、現在も案外なる方面に影響を残して、いわゆる鈴木商店の「生産ほど尊いものはない」――鈴木事変の時に金子直吉総帥が、新聞記者と対談したときの言葉の一節――との実をあげている例を一つ、ここに報告したいとおもう。それは再生ゴムの製造、または広義にゴム製品についてである。たまたまこれらの仕事に、接触して来たため、記事が、半ば個人の回顧談の如くなるが、その点は見すごしていただきたい。

自分は、大正五年鈴木入社の一人であって、人社の際、故西川文蔵支配人に引見された。そのとき支配人は、出身の同志社大学の学科目に植民政策、農業政策、労働政策等のならんでいるのを指摘して「学校も少し考える必要がある。君は商売よりも、工場が良かろう。工場へ行って貰う」といわれ、当時、神戸市の東端、岩屋にあった東レザー株式会社敏馬分工場へ派遣された。この工場はゴム工場にて、主として「さくら・タイヤ」「スマート・タイヤ」「アヅマ・タイヤ」のマークにて、評判のよかった自転車タイヤ、チューブを製造し、次第に製品を拡大して、ホース、パッキング、エボナイト類、及び自動車タイヤも見本程度に作るようになった。工場長は石油のため北樺太や、ニコラエフスクで活動した今井完造氏。この工場は、もと鈴木商店が、松島誠さんの手で輸入しすぎた外米を飴として処分した飴工場で、火災にあって、ゴム工場に転換したのであった。建物は三階煉瓦建百五十坪位のもの一棟と、旧灘五郷式の酒蔵一棟とよりなり、工員ははじめ五十名位、元帳資本主勘定は、わずか六万円であった。しかし第一次欧州大戦による鈴木商店の黄金時代を通じて、ファイバー（硬質繊維板）工場を創設し、ボルネオ島サラワークのゴム農園と合併し、東レザー株式会社より分離して、株式会社日沙商会となり、元帳の資本主鈴木商店勘定は四百万円に達した。

なお、この機会に、東レザー株式会社につき、大略の説明をしておきたい。当社は、本社及び本社工場を大阪の稗島におき、主製品は模造凝革で、売先は御堂筋の下駄の花緒屋松屋町の鞄屋、谷町の洋服屋等であったらしい。鈴木商店としては化学工業方面へ進出する門戸であった。

社長佐藤法潤、取締役松島誠、本庄利平氏等。技師長久村清太氏。久村氏はレザーとゴムの技術指導と共に、秦逸三技師と協力、米沢での人造絹糸の研究に力をそそいでいた。レザー、ゴム、人絹と製品が多様化したため、社名を東工業株式会社と改め、やがて人絹工場が広島に建設され、帝国人造絹絲株式会社が意気揚々と生れた。創業のとき、広島工場を訪問したるに、本庄さんは「勝てば官軍だ」と繰返えされた。

東工業株式会社敏馬分工場が、株式会社日沙商会となったことは前述の如くであるが、その成立の経過を、もう少し詳しく述べてみたい。

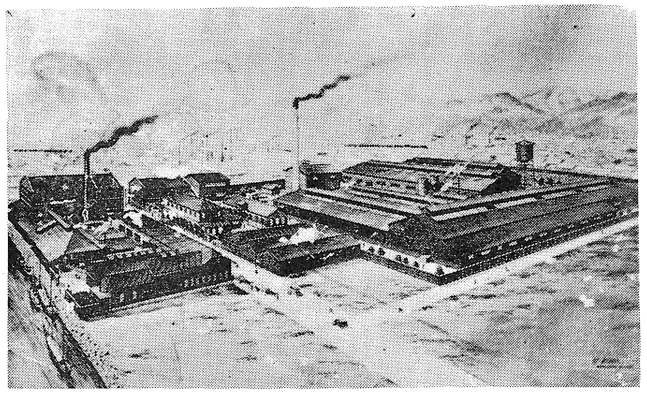
元来、日沙とは、日本とサラワークを連結した文字にて、鈴木商店が、ボルネオ進出以前に、二人の青年が、貿易を開拓せんとしてクーチン市に日沙商会なる看板をあげていたらしい。依岡省三氏が渡航して国主英人ブルークに、土地永代租借を交渉にかかった時、この青年等に、或程度の資金を援助した。鈴木商会が、奥地の原生林を開墾してゴム農園を作り、次第に事業が固った時代には、農園全体を日沙商会としたらしい。省三氏の没後、令弟省輔氏が統裁したが、現地へは、西川玉之助、農園長大関雄只氏が赴任していた。

以上の如き農園とゴム工場を合併して、さらに株式会社日沙商会となった。社長依岡省輔、役員西川玉之助、芳川筍之助、永井幸太郎、今井完造氏等、支配人近藤正太郎、農園長大関雄只、ゴム技師長野村敬氏。

その後、ファイバー工場を隣接地に建設した。そもそもファイバーという商品は、綿繊維を多量に含有する厚紙を主原料とし、これに塩化亜鉛溶液を浸透して作る一種の硬板である。堅牢にして加工には鉄と同一の道具を使用せなければならない。用途は電気の絶縁材、及び各種の容器、紡績工場のケンスであった。ファイバー工場新設のとき、日本の年間輸入量は三百万円であった。鈴木商店と同時に、三井物産系も帝国堅紙株式会社を創立したのであった。技術の導入には、ボストンのスタンダード・ファイバー株式会社の技師長であったトーバルト・ハンゼン氏を二カ年間の契約にて雇入れた。氏は神戸滞在のとき、五十才台であった。技師長には楠瀬時治氏が、染料工場より転出して来た。後年、ゴム工場は日輪ゴム工業株式会社となり、現在姫路駅の南側にて、さかんに煙を上げている。又ファイバー工場は帝国堅紙と合併して、東洋ファイバー株式会社となり、今も業界の指導的地位にある。

さて、ここで再生ゴムについて語りたい。東レザー敏馬分工場、のちの日沙商会ゴム工場では、大正六年以来、すなわち日本にて、ダンロップが、はじめて再生ゴムを作り出した大正五年の翌年より生ゴムを製造し、自家工場にて使用して来たが、原価は、一ポンド当り、七〇銭となり、期待していたほど有利ではなかった。その原因は、間接加熱のため石炭の使用量が大きく、又苛性ソーダ溶液洗滌にあたり、流れ去る量が多かったのである。しかし、引つづき使用しつづけた。

ところが、一度合併によって陣容を整えた日沙商会は、業界の遷りかわりに対応して、再び分立することとなった。その原因は根本には、大正七年十一月の第一次欧州大戦の休戦の影響ともいい得るものであった。戦争の勃発により鈴木商店は、満身のエネルギーを活用して、商売に、工業に活動したが、休戦喇叭は、事業調節のやむなきことを告げ知らした。しかし、実際上では、なかなか大軍の敵前後進はむつかしいものである。ついに鈴木商店も機動力のバランスを失い、主取引銀行であった台湾銀行へ全事業の権利を書入れするの非運に際会した。その時の様子を想起するため、自分の触れた一場の光景を述べてみたい。



それは、ある日の午後、本店秘書課の椋野武吉秘書より電話がかかり、すぐ日沙商会社印、役員判を取揃えて持参せよとのことであった。自分は支配人にかわって、秘書課へ出頭したところ、椋野さんより、一綴の書類を示され、これに判せよとのことであった。よってこれを読み下ったところ、内容は、会社の全株式を台銀へ差入れる承認書であった。よって自分は、独断で捺印出来ない。一度役員の耳に入れておく必要があるといった。これに対し、椋野さんは、全株式を所有する鈴木商店が云うのだから、君のいう手続は、あとでよい。今はそんなことを云うて、いられる場合でないのだと説明された。

このような状勢に当っては、鈴木関係の各事業は、緊褌一番、一層働く必要があった。株式会社日沙商会では、本店の動揺ばかりが動機では無かったが、会社を二分することとなり、ゴム部を分離して、日輪ゴム工業株式会社となった。酒井さんは、これまで日輪ゴム合資会社の無限責任社員で、本店にあって、サクラビールと、自転車・チューブの販売を主宰しておったので、このたびの変化は、同氏の管理下にゴム工場を加えたのであった。しかし、同氏は工業用品販売には、これまで関係がなかったのである。このため日輪ゴム工業株式会社の出現に当り、販売経験のあるタイヤ・チューブだけの製造にとどめ、工業用品の方は止めようと発言された。この方針は現実には会社の退嬰であるから、自分は会社のために反対であった。しかし酒井さんは、店としては大先輩であり、同氏と自分の発言の比重は問題にならない。ここにおいて自分は勇気を出して、台湾銀行より来任の佐々木監査役を本店に訪問して、資料によって酒井案の不可を説明した。結果は、酒井さんも強いて主張を固執されず、工業用品製造は生残った。

この一節の経過が気拙かったのと、別に野心も手伝って、自分は、この機会に店を退社して独立営業に踏込んだ。そこで神戸に友屋商店なる営業所をつくり、当時、同業者のない、再生ゴムとエボナイト粉末の販売をはじめた。その時は、NHKラジオ放送開始の年で、受信機のエボナイト板には、エボナイト粉末を要し、時機に投じてホームランの第一発であった。しかし、考えてみれば、奉行人というものは主家の苦難のときにこそ、一身をささげて奮闘すべきに、あの際、鈴木商店を退社したことは、自分の終生、恥としていることである。

その後、ファイバー部の楠瀬技師も退社し、かねてより主張していたオーバープレートによる再生ゴムの製造を開始することとなった。この目的にて当時、鳴尾の豊年製油株式会社の東側にあって、休止していた旧寒天工場の使用法を本店に申出で承認を得た。建物は八十坪位にて、幸い寒天製造に使用した二基の高圧釜が残ってあり、更に二基を神戸製鋼所にて造って貰い、いよいよ再生ゴムの製造を開始した。製品の販売は元染料工場技師朝倉忠憲君と自分とで当った。楠瀬氏は表裏のない技術家肌の人で、金子さんの後援で京大工学部卒業、柳田さんの奥様の姪御であるおせんさん（現準会員）と結婚、店に恩義のふかい人であった。金子さんも作業見学に来られ「再生ゴムで鈴木の再興を助けられないか」と云われた。楠瀬工場は時機がよく、英国政府がマレー半島の農園に対し四割の生産制限をしたため、生ゴムは三十銭位から二円まで高騰した。従って再生ゴムは順風に帆を上げた如くで、製品は在庫する暇なく、工場建設費は、たやすく回収されたがマレーの生産制限は二年未満にて撤去され、こんどは、暴落である。ついに神戸市場で生ゴム、ポンド十四銭の相場が半日あった。このとき鈴木商店ゴム部の打った手をエピソードとして、思い出してみたい。店のゴム部では、神戸相場二円のとき、先物を一円で売向った。そして契約と同時に手附金五十銭を受取り、残金五十銭は神戸着引換え渡しの契約であった。この思惑は見事に適中し、現品神戸着のとき、相場は五十銭を割って仕舞った。

生ゴムの下落が、このようでは再生ゴムも同調して、ついに両者が同値となったから、常識上、万

事休すで、楠瀬工場は閉じて仕舞った。

この時、自分は頗る剛情であった。それは以前に、英国ゴム雑誌にて、再生ゴムは技術上、配合剤として絶対必要であり、値のいかんに係らず、生ゴムの四割までは、使用されるとの記事を見ていたので、今後は、自分だけで単独事業を続行することときめ、尼崎市の神崎駅前に友屋ゴム製造所なる小工場を建設して、再生ゴムを続行製造し、昭和七年から十三年五月まで及んだ。

このとき、たまたま東洋紡績株式会社は、かねてより自動車タイヤ、コードのメーカーであり、一方名古屋にトヨダ自動車株式会社が出現したので、トヨダの自動車用タイヤを名古屋にて製造せんとの計画を立て、東洋紡と名古屋の代表的実業家が手を握った。ところがこのころ、漸く東亜の空は戦雲濃くなって来たため、政府は資本の新投入を認めず、工場新設は不可能となったので、ここで新設を断念し、既設工場の買収合併の方針をとった。しかし、東洋紡績では、ゴム工場経営の経験なく、適当なる担任者を有しなかったから、はじめに試験的に小工場を買収することとなし、その白羽の矢は、自分の経営せる友屋ゴム製造所に当り、又、自分もゴム経験者として入社し、同社のゴム事業建設拡大に参加することとなった。東洋紡は第一着手に友屋ゴム製造所を資本金拾万円の内外再生ゴム株式会社に改組し、社長に名古屋商工会議所会頭神野金之助氏、専務に東紡調査課長鷲尾甚之助氏、自分は取締役支配人として席末に列した。以後、既設会社を買収合併し、資本金八百万円の東洋ゴム化工株式会社となり、又合成ゴム製造の目的にて分身会社東洋合成化工株式会社を設立した。なお本来の目的である自動車タイヤ製造の促進拡大のため、神戸市のダンロップ極東ゴム株式会社の買収を交渉したが、陸軍は東紡の買収よりも協力を希望し、東紡にてダン社株式の五分の一を保有し、役員を派遣することとなった。これは東洋ゴム発足後八年目のことであった。ダンロップ合併中止を機会として社長以下役員更替し、後任社長に富久力松氏就任、社名を東洋ゴム工業株式会社と改称、数次の増資により資本金五拾五億円となり、一応、ダイヤ・メーカー四社のうちに加わることが出来た。

さて、話題は今一度再生ゴムのことに転じたい。大正六年、脇之浜の東レザ敏馬分工にて、始動した再生ゴムの作業は、鳴尾の楠瀬工場、尼崎の友屋ゴム製造所東洋ゴムの川西再生ゴム工場—昭和二十八年再生ゴム月産九十二噸—と引つがれて、作業を継続し、経営者は三転四転したがバトンを引つぎ、過去五拾年、連綿成長して来たのである。東洋ゴムが今日本邦二、三位のゴム会社として進出したのは、全く東洋紡の組織資力、企業精神によるものであるが、しかし其間に鈴木商店伝統の「ねばり」が合流したことも否めない。

追って、自分は東洋ゴム引退後同社が創立の中国精粉工業株式会社々長に就任、ついで昭和二十四年十二月、新法人として再出発の伊藤忠商事株式会社に入社、従来の繊維部に対して新発足の物資部の顧問となり、在職九年、六十八才にて退社。現在は新見化学工業株式会社の会長の職に在り、かぞえ年七十六才となった。さいわい健康を感謝している。

わが心の自叙伝（二）

金子武蔵

この家の選定に母の意向がどれだけ盛られていたかは、今となってはたしかめようもないが、しかし結果的には母の趣味にピッタリ合ったものであったことは事実である。母はのちにせん女と号するホトトギス派の俳人となり「夏草」という句集を上梓したがそこには大正五年の新年のものとして

雑煮すや　朝潮ゆるく　浜によす

という句がある。大正五年といえば、すでに一谷山荘に移っていたときであるが、この句には、二の谷時代の回想が織りまぜられていると見てよかろうと思う。

明らかにあとから増築せられたのは台所の西側にある八畳ばかりの子供部屋とオモヤの北側の廊下から西に通じている十畳ばかりの洋風の応接間であった。兄はやがて父の故郷高知市の小学校に転じたし、またこの家では亡弟猪一（四十五年）が生まれたけれども共にまだいとけなくオモヤで母が直接世話をしていたらしく、私は多くの時を亡妹常子と子供部屋ですごし、最初、もとの住友家別邸のあたりのところにあった幼稚園に通い、ついで当時は須磨寺の西南近くにあった小学校に通った。応接間についてよく覚えているのは冬には暖炉にあかあかと火が燃えていたことである。けだし父の貧血症がようやく顕著にならんとしていたことを物語るものであった。よく来客があったが、当時は帝人の創成期であるから、神戸税関署に勤務していて、のちに帝人の専務となった故秦逸三氏も来客のうちに含まれていたのであろう。

この応接間に玄関があり、父の在宅するときには書生さんの一人が控えていた。

父の設備欲はこの家でもムラムラと燃えあがり、母の好んだこの谷川のせせらぎは地下に消えることになった。

家から一町半ばかり谷にそって行くと、小さいながら滝があり、その右手のガケをのぼると、そこには私どもが水源と呼んでいたものがあった。鉄拐の峰のすそをぬって、そこには清流が流れていたが、父はこれを水道に利用した。またこの谷間がやや広くなったあたりから家をすぎて、四、五十間下まで、全体で二町ばかりの距離を埋め立ててしまったので、この谷川は地下の暗キョを流れることになったのである。

工事が始まったころ、タヌキがいるというので、父はその穴をトウガラシでくすべさせたが、その赤トウガラシをうまいから食えといって私に与えたところ、ただ変な顔をしただけで平然としてうまいと答えた由である。また二町ばかりの暗キョをローソクをたよりに学友と通り抜けたのも一再ではない。始末の悪いゴンタだったのである。

生まれて間もない子グマが贈られたことがあったが、さびしい谷間の家の頑童は友を得たかのように狂喜した。時は梅雨のころであって、父の故郷高知からはイチゴのようなヤマモモが届いていたが、ジイヤンのスキをうかがってこれを子グマに与えた。大好物とばかり鉢にむしゃぶりつく子グマの喜びは同時に頑童の喜びであった。しかし頑童の友たることは災難でもある。家から西北二、三十間のところにかなりの池がつくられていたが、子グマはこの池に投げ込まれた。しかし頑童の予想を裏切って子グマは彼よりもたくみに泳ぎ、何回となく池を回ってあたかも水泳を楽しんでいるかのようである。これを見て頑童は手をあげ歓声を発して狂喜したのである。またこの子グマに犬の首輪をつけ、鎖でひいて海岸につれ出して水泳や魚釣りの伴をさせた。まったく人騒がせな話である。

ロバもいたのでむやみにそこらあたりを乗り回したが、クマよりは知能が少々上とみえて、うるさくなると、わざと木のそばを通って振り落そうとする。（ただし乗り手のいかんによって手加減をするものは馬に限ったことではなく、会社にも官庁にも学校にもいる）そのため生傷がたえることがない。

家から海岸に向って四、五十間の距離は、ゆるやかながら傾斜をなしていたので、工事の資材を運ぶためにトロッコが設けられていたが、ゴンタがこれを見のがすはずがない。最初は近距離運転にとどめていたが、距離はしだいに長くなり、ついにトロッコは暴走して二、三十間下のできたての大きな門を大破してしまった。

気がつくと例の植込みに面した部屋に寝ており、そばには白衣の女性がいる。一時気を失い、療病院から看護婦さんがはせつけていたのであろう。

学者とか思想家とかの伝記を読むと、幼いときに父とか祖父の書だなから、あるいは倉から書物をとり出して、まだ読めないままに異常な興味をそそられたというようなことがよくしるされている。しかし私の家は少し立身した番頭さんの家柄にすぎぬから、そういう機会はない。子供部屋で読本をよんだとか習字をしたとかいう記憶もなく、ただ時折オモヤに呼び出されて、母にオサラエをしてもらっただけである。学校から帰ると、カバンを投げ出して遊びほうけていたのであろう。しかしそれでいて格別成績が悪いというわけでもないので、ご多分にもれず親バカであった両親は黙認していたことと思う。しかしその私にも今日を予示するようなことが全然なかったわけでもない。

ヤスパースは「哲学入門」において 哲学的な 問いは 何人にもあり、したがって子供にも見出されるとしているが、たとえば西洋の子供は、神様がこの世を創造したと教えられると、すぐ、この世が創造される以前には、なにがあったかと問い返すことが多いが、これはカントのアンチノミーの問題がすでに子供にもあることを証するというわけである。そのようなことが私にもなかったわけではない。あるとき、家のなかに、なんとなく暗い空気が漂い、母がよく泣いていたことがある。今にして思えば、兄の高知市の小学校への転学が実行に移されようとしていた時であったのであろう。私は、ひとり例の 洋間の 椅子にもたれて、あかあかと燃える暖炉の火を見ながら死んだのちはどうなるかと、いつまでも、物思いに沈んでいたことをおぼえている。

吹く風の、いずこより来り、いずこに去るやが、さだめがたいと同じように、我のいずこより来たり、いずこに去るやは、答えがたい問題であるが、いまでも、それが哲学の基本的問題にほかならないと考えている。暖炉を前にした物思いは、頑童がやがて灰色の人生を、いやがうえにも灰色に描く憂愁（キルコゲール）のとりことなり、また日暮れて羽ばたくミネルバのふくろう（ヘーゲル）に心を寄せはじめる前兆であろう。

暴走して門を大破したトロッコは、二の谷川を埋め立てるためのものではなかった。当時、二の谷川はすでに暗きょのうちに消え去っていたからである。このトロッコは家の西側から北側を回り、ガケの中腹にあった例の「二階」の左手にある高さ四十間ばかりの坂に設けられたレールをロクロで引き上げられて盛んに資材を運搬していた。このレールの左手につづらおりの坂があったが、これをのぼりつめると、そこは二の谷と一の谷との間にある別の谷間の始まるところであった。この谷は深さ三、四十間のもので、底には泉がわき、よくキジが水を飲みにきていた。レールが敷き始められたころ、私は、あの子グマの 飼育係の 春吉さんのあとをついて、こわごわ泉までくだったことがあるが、時あたかも盛夏の候で、そこいらには草木がやたらに繁茂していて、子供心になんとなくものすごい感を受けた。父の設備癖は東西三十間ばかりのこの谷間を南方四十間ほどのところまで埋め立ててしまい、ために二の谷の山容についで一の谷の山容もまた一変してしまったのである。この谷間の北方および東方の土地は盛んに掘りくずされ、その土がまたトロッコで運搬されて谷間に投げ込まれた。そうして埋め立てによってえられた地面の南端には、城壁のように堅固な石がきが築かれた。山容の変わりようを完成時の姿でいうと、埋め立てによってえられた土地には野菜とイモのほか、父の好物であるイチゴやスイカが栽培せられた。菜園の北の切りくずされた土地は芝生となっていて、その東北のガケの下には、かなりの池がつくられた。池の左手の石段を三、四間のぼると、趣のある松の大樹のもとにはあずまやが設けられていた。芝生の西の、やはり切りくずされた土地には猿の小屋と温室とがあり、さらにその西に